

委任統治期南洋群島における内地観光団 (1922-1924年)

千住 一

はじめに

本稿の目的は、日本の統治下にあった南洋群島において実施された「内地観光団」(以下、観光団)のなかでも、1922年から1924年にかけて内地を訪れた計3回の観光団に着目し、関連史料に依拠しながら各観光団の行程および参加者について整理することにある⁽¹⁾。

日本は、第一次世界大戦を契機にドイツ領であったミクロネシア一帯を占領し、「南洋群島」という名の下でアジア太平洋戦争に至るまで統治し続けた。本稿が対象とする1922年は統治体制の変換期であって、従来の統治機関であった臨時南洋群島防備隊(以下、防備隊)が3月31日付けで南洋群島から完全撤退し、4月から新たな統治機関として南洋庁が設置された⁽²⁾。

防備隊による統治期間を軍政期と呼ぶのに対して、南洋庁による統治期間は委任統治期と呼称することができる。本稿の考察対象である観光団とは、南洋群島の旧来からの住民(以下、住民)を参加者として、数週間にわたって内地に滞在し、内地各地を経巡ってから南洋群島へ帰還するというものであるが、軍政期に計6回、委任統治期に計18回の観光団が年1回ずつ実施されたことが、現時点で確認されている。

筆者はこれまで、軍政期に実施された観光団の全体像ならびに委任統治期に実施された観光団の概要を明らかにしてきた⁽³⁾。特に本稿の考察対象である委任統治期については、南洋庁が発行した統計資料に依拠し、全18回の

観光団の参加人数や参加者の所属支庁⁽⁴⁾、拠出された「補助金」の額などを整理した。よって本稿での作業は、これら基礎的知見にもとづいて行われる、各観光団の詳細に着目した試みとして位置づけられよう。

なお、本稿では1922年の観光団を第1回としているが、これは委任統治期に実施された1回目の観光団という意味である。上記のとおり、軍政期には計6回の観光団が実施されており、通算するならば、1922年に実施されたのは第7回観光団となる。以下、1922年の第1回、1923年の第2回、1924年の第3回観光団について見ていくこととする。

I 第1回内地観光団（1922年）

1. 行程

1922年に実施された第1回観光団に関する史料としては、新聞各紙による報道がまず挙げられる。【表1】は、一連の新聞報道にもとづいて再構成した内地における行程である。また、南洋庁の職員としてこの観光団を引率した稲波賢逸は、後の回想のなかで、東京、京都、奈良、大阪、門司の順で移動したことを指摘している⁽⁵⁾。これらより、第1回観光団は8月4日から25日まで内地に滞在し、横浜、東京、横須賀、京都、奈良、大阪、門司を訪れたと考えられる。

続いて、こうした観光団の行程を順に詳しく見ていくと、一行は日本郵船の「泰安丸」に乗船して横浜に入港し、東京滞在中は「繁星館」に宿泊した⁽⁶⁾。内地到着翌日の5日の出来事については各紙とも詳しく報じており、それによると一行は、拓殖局長官である赤池濃と拓殖局にて面会した後、宮城へ向かった。宮城では、「特に思召しを以て[中略：引用者]拝観を差許されたので普通の通過拝観と違って三殿から長くも御宮居の玉階間近迄も拝観」したとあるように⁽⁷⁾、宮中まで立ち入ることが特別に許されている。

一連の新聞報道では、東京滞在中のその他の行動内容を明らかにすることはできないが、上記した稲波の回想によると、一行は東京滞在中に明治神宮、靖国神社、浅草、銀座、三越、花王石鹼工場を訪れたとあり、また、「その間一日の休養がありますが、ぎっしり詰ったスケジュールで行動するので、

雨が降ろうが休みなく歩き廻った」という⁽⁸⁾。

その後一行は、上記のとおり京都へ移動しているが、稲波によると京都では「市役所から綺麗なガイドが二人来て毎日案内してくれ」た⁽⁹⁾。また、各新聞報道によると、20日の大阪見物は市役所の案内によるものであり、大阪では「金龍館」に、門司では「木村旅館」にそれぞれ投宿している。

ところで、稲波によると、往路においては「泰安丸」にてパラオからヤップに移動しながら観光団参加者を集め、サイパンに寄港した際には上陸して「見物」を行い、そこから内地へ向かっている。同様に復路においても、門司から乗船した「泰安丸」にて、サイパン、ヤップ、パラオという順で上陸し、参加者を下船させた⁽¹⁰⁾。

2. 参加者

先述した南洋庁発行の統計資料には、第1回観光団の参加人数が23名であり、参加者はヤップ支庁およびパラオ支庁の住民であると記されているが⁽¹¹⁾、多くの新聞も同様の報道を行っている。

また、参加者の属性については、「村長、助役、巡警、農、大工等色々の職を持つ人達」や⁽¹²⁾、「村長も居れば大工も居り、巡警も居れば給仕も居る、最年長者は五十二歳の百姓で一番若いのは十二歳の小娘である」といった報道がなされている⁽¹³⁾。なお、この12歳の少女は観光団唯一の女性参加者であるとされ⁽¹⁴⁾、一行の通訳は、日本語を「特に頗る上手」に操る参加者のひとりが務めたとある⁽¹⁵⁾。

ところで、観光団参加者のなかには、東京滞在中に体調を崩して麹町病院に入院した者が2名おり、そのうち1名は退院して一行とともに横須賀に向かったが、別の1名はそのまま入院し続けたという⁽¹⁶⁾。その他、上記した稲波がそうであったように、南洋庁の職員3名が南洋群島から観光団を引率しており、稲波のほか2名の名前も新聞紙上に頻繁に登場する。

Ⅱ 第2回内地観光団（1923年）

1. 行程

1923年に実施された第2回観光団の行程に関わる史料としては、当時の新聞報道および外務省外交史料館に所蔵されている文書がある。後者は、大阪府が内務省や外務省などに宛てて発信したものであり、大阪府内における一行の訪問先が報告されている¹⁷⁾。これらの史料にもとづいて内地における行程を再構成したものが【表2】であり、この表から、一行は8月10日から内地に滞在し、横浜、東京、名古屋、京都、奈良、大阪、門司の順で各地を訪れ、29日以降に門司を出発したであろうことが分かる¹⁸⁾。

続いて、こうした第2回観光団の行程を順に詳しくみていくと、日本郵船の「八幡丸」に乗船して7月25日に南洋群島を出発した一行は、横浜へ入港し、東京滞在中は「繁星館」に宿泊した。13日の茶話会とは南洋協会主催によるものであり¹⁹⁾、南洋協会発行の『南洋協会雑誌』には、茶話会は16時から東京会館において開催され、会終了後は屋上庭園にて記念撮影を行ったとある²⁰⁾。

東京を後にした一行は、21日に名古屋を訪れているが、市役所では名古屋市長である川崎卓吉や助役たちとともに昼食をとったという²¹⁾。また、その後向かった京都では、三条の「日吉屋」に投宿したとあるほか、23日に予定されている奈良行きは日帰りであるとされている²²⁾。その他、上記した大阪府作成の文書には、大阪での一行の滞在先が「金龍館」であった旨、記されている。

2. 参加者

先述した南洋庁発行の統計資料には、第2回観光団の参加人数が19名であり、参加者はトラック、ポナペ、ヤルート支庁の住民であると記されているが²³⁾、多くの新聞も同様の報道を行っている。

また、参加者の属性については、首長およびその関係者、巡警、宣教師、助教員、学生といった報道が散見されるとともに²⁴⁾、年齢については「十六歳から五十一歳」という報道が看取される²⁵⁾。なお、参加者の性別に関して

は、一連の新聞報道および各紙が掲載した写真から、この観光団への参加者はすべて男性であったと判断できる。

ところで、『万朝報』には観光団への参加費用についての記述があり、そこには、「以前の如く旅費等は全部給与するのではなく、三百円の中半分は支弁とのことである」と書かれている²⁹⁾。その他、第2回観光団においても南洋庁所属の職員が引率者として南洋群島から同行しており、職員の存在は新聞紙上で頻繁に取り上げられている。

Ⅲ 第3回内地観光団(1924年)

1. 行程

1924年に実施された第3回観光団の行程を把握する上で、有益な史料がいくつか存在する。順に見ていくと、まず、1924年6月27日付けで南洋庁から陸軍省宛に送付された文書が挙げられる³⁰⁾。これは、第3回観光団の実施に先立ち、第四師団司令部および大阪城の観覧許可を陸軍省に求めるべく南洋庁が作成したものであり、そのなかには、観光団の内地における行動予定一覧が付されていた。【表3】に「予定」として示したものがそれである³¹⁾。

第二が、『日の光』という雑誌に掲載された観光団参加者による手記である。この雑誌は、住民児童の学芸奨励を目的に1924年4月9日に設立された「恩賜財団奨学会」が発行しており³²⁾、「南洋群島ノ子供たち」を読者として、「タメニナル事ヤオモシロイオ話ヤミナサンノシラナケレバナラナイ事」や「ミナサンノヨクデキタツヅリカタ」を掲載することを主旨としていた³³⁾。

第3回観光団の参加者の一人である公学校卒業生が、この『日の光』にカタカナ文による「観光団日誌」を寄稿しており³⁴⁾、その内容を整理したものが【表3】の「実施」である³⁵⁾。それに従うと、一行は、7月27日から8月18日まで内地に滞在し、横浜、東京、名古屋、京都、奈良、大阪、神戸、門司の順で各地を訪れており、若干の日にちと訪問先のずれが看取されるものの、上記した「予定」から大きく外れることなく観光団が遂行されたことが分かる。

続いて、参加者による「観光団日誌」や一連の新聞報道などに依拠しながら、第3回観光団の行程を順に詳しく見ていくと、一行は日本郵船の「筑後

丸」で横浜に入港し、東京滞在中は「繁星館」に宿泊した。29日は宮城と三越を訪れたほか、「観光団日誌」には記載されていないが、南洋協会主催の歓迎会が丸ビルの精養軒で開催されており、『南洋協会雑誌』によると、「茶菓を饗し、長途の労を犒ひ同屋上庭園にて記念撮影」を行ったという⁸³。

東京を後にした一行は、8月2日に名古屋を訪れ、「丸屋旅館」に投宿した。『新愛知』は3日の行動について詳しく報じており、それによると一行は、「浅野木工場熱田神宮等へ至り正午市役所で昼食の御馳走を受け」たほか、市内各所を訪れ、夜は活動写真を観覧している⁸⁴。また、「観光団日誌」によると、7日に訪れた奈良は京都からの日帰りであり、奈良では「大ヘン大キナダイブツ」を見たことと記されていることから⁸⁵、東大寺を訪れたと考えられる。

その後一行は大阪を訪れ、「金龍館」に投宿しているが、『大阪時事新報』によると、9日は市招待の昼餐会のほか、大阪時事新報社、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社を訪れたという⁸⁶。10日の訪問場所について、「観光団日誌」には「リクダンノヘイタイガオラレルトコロ」としか記されていないが⁸⁷、先に指摘した南洋庁作成の文書の内容から、大阪城内に駐屯していた第四師団のことであると推察される。なお、「観光団日誌」に11日の行動内容に関する記載は見られないが、『大阪時事新報』には、造幣局と東洋紡績を訪れる予定であると記されている⁸⁸。

「観光団日誌」によると、12日の神戸行きは奈良と同様に大阪からの日帰りであり、そこでの様子を『神戸新聞』は、「市役所を訪れた上楠社に参拝午後からは川崎三菱両造船所を参観」したと伝える⁸⁹。その後、一行は門司へ向かい、門司から「筑後丸」にて南洋群島へ向けて出発している。

ところで、「観光団日誌」には内地滞在中の様子だけではなく、その前後の出来事についても詳しく記されている。それによると、一行は7月18日にパラオを出発し、19日にヤップ、22日にサイパン、25日に小笠原にそれぞれ立ち寄っているが⁹⁰、なかでもサイパンでは、「ミセヤウチヤジテンシャヤハタライテイルウシ」などを見た後、「ヤクショエゴアイサツ」をしに行っている⁹¹。同様に、復路においても、22日に小笠原、25日にサイパン、29日にヤップにそれぞれ立ち寄ってから、30日にパラオに到着しているが、パラオ

では、支庁長および内務部長からの訓示があった後、観光団は解散したと記されている⁴²⁾。

2. 参加者

先述した南洋庁発行の統計資料には、第3回観光団の参加人数が28名であり、参加者はすべてパラオ支庁の住民であると記されているが⁴³⁾、多くの新聞も同様の報道を行っている。

また、参加者の属性については、先に指摘したように「観光団日誌」の著者が公学校の卒業生であったほか、「パラオ島の村長、巡警、教員、生徒等の同島知識階級」⁴⁴⁾、「何れも島では巾利きの巡警さん村の助役さん其他知識階級の連中ばかりである」といった新聞報道が散見されるとともに⁴⁵⁾、日本語を話すことができる住民が一行の通訳を務めたとも報じられている⁴⁶⁾。なお、一連の報道内容を踏まえる限り、第3回観光団の参加者はすべて男性であったと推察される。

ところで、『都新聞』は観光団参加者について触れるなかで、「孰れも日本観光を楽しみに数年間勤勉に働いて費用を貯蓄したと云ふ熱心さである」と書いている⁴⁷⁾。その他、第3回観光団においても南洋庁の職員3名が引率者として南洋群島から同行しており、「観光団日誌」および新聞報道のなかに職員が多く登場する。

おわりに

ここまで、1922年から1924年にかけて実施された3回の観光団の行程および参加者の詳細について、各史料に依拠しながら整理した。以下、各観光団の共通点および相違点に注意しながらその成果をまとめる。

まず行程であるが、横浜、東京、京都、奈良、大阪、門司という訪問先は各観光団に共通しているものの、横須賀は第1回のみ、名古屋は第2回および第3回、神戸は第3回のみ訪問となっている。また、第3回において名古屋滞在が複数日になり、神戸への日帰り訪問も実施されたためか、第3回での東京滞在日数は過去2回の観光団よりも短い。

研究ノート

各地の訪問先については、明らかになった訪問先に関してのみであるが、3回の観光団を通じてほぼ共通していたといえよう。また、東京および大阪での宿泊先も3回の観光団で共通していたし、南洋庁の職員が南洋群島から一行を引率したというかたちにも変化はない。

次に参加者についてであるが、人数に関しては23名、19名、28名という推移をたどり、属性に関しては、首長、首長関係者、巡警、公学校関係者らが含まれると報道された。また、性別に関しては、第1回に12歳の女性が参加した以外はすべて男性であった。その他、参加費用に関しては、第2回と第3回のところで指摘したように、観光団参加者が一定の金額を負担していたと考えられる。

最後に指摘したいのは、観光団による内地訪問の前後に実施された南洋群島内における移動であり、特に第1回と第3回ではサイパンに上陸し、各所を見て回ったことが明らかになっている。つまりここに、南洋群島各地に居住する住民たちによる「南洋群島観光」とでも呼ぶべき状況が見て取れるのである。

なお、委任統治期に実施された観光団が有していた軍政期からの連続性／非連続性や、委任統治期を通じての連続性／非連続性、南洋群島統治行政のなかの観光団の位置づけなどについての考察は、委任統治期における全観光団に関する知見の整理が終了した時点で、改めて行うこととしたい。よって筆者に課せられた当面の課題は、委任統治期に実施された残りの観光団についての詳細を、徐々に明らかにしていくことにある。

謝 辞

故山口洋児氏および辻原万規彦先生（熊本県立大学 環境共生学部）からは、本稿で取り上げた3回の観光団に限らず、委任統治期に実施された観光団に関わる多くの史料の提供を受けた。ここに記して感謝の意を示したい。

注

- (1) 依拠する史料の成立背景上、今日では使用が躊躇されている表現が引用されている場合がある。また、史料引用に際して、旧字体の漢字は新字体に改め、ルビは省略した。なお、地名に関しては、当時の南洋群島において一般的であった地名を使用している。
- (2) 日本による南洋群島統治の概要および関連する研究動向については、以下を参照のこと。千住(2009a)。
- (3) 千住(2006a、2006b、2009b)。
- (4) 委任統治期の南洋群島は、サイパン、ヤップ、パラオ、トラック、ポナペ、ヤルートの各支庁に分かれており、各支庁には支庁長が置かれていた。
- (5) 南洋群島協会編(1965:60)。
- (6) 『東京朝日新聞』によると、同時期の繁星館には、南洋群島からフィリピンに漂流し、南洋庁の仲介で東京に送致されてきた6名の住民も滞在していた。『東京朝日新聞』1922年8月17日付け朝刊2面。
- (7) 『都新聞』1922年8月6日付け朝刊10面。
- (8) 南洋群島協会編(1965:59)。
- (9) 南洋群島協会編(1965:60)。
- (10) 南洋群島協会編(1965:58-60)。
- (11) 南洋庁(1934:472)。
- (12) 『大阪毎日新聞』1922年8月22日付け朝刊7面。
- (13) 『大阪朝日新聞』1922年8月22日付け朝刊2面。
- (14) 『時事新報』1922年8月5日付け夕刊6面。
- (15) 『東京日々新聞：横横版』1922年8月5日付け朝刊7面。
- (16) 『二六新聞』1922年8月16日付け夕刊2面。
- (17) 大阪府知事土岐嘉平より内務大臣水野錬太郎、外務大臣内田康哉、指定庁府県長官宛「南洋群島々民観光団来往ニ関スル件」1923年8月29日(外務省外交史料館所蔵『大正十年外国人渡来観光団：二』)。
- (18) 観光団が門司から出港する予定であることを伝える報道は散見されるものの、実際に出発したことを報じる新聞記事は、現時点で未見である。しかしながら、大阪府が29日付けで作成した文書には、一行は、南洋群島に帰るため「二十八日午後十一時二十五分大阪駅発列車ニテ門司港」へ向かったとあるため、門司出港は29日以降であると考えられる。同上史料。
- (19) 南洋協会とは、「南洋ニ於ケル諸般ノ事項ヲ講究シテ相互ノ事情ヲ流通シ共同ノ福利ヲ増進シ以テ平和文明ニ貢献スル」ことを目的として設立された団体であり、経済団体的性格が強かった。南洋協会(1925:6-7)。
- (20) 南洋協会(1923:80)。
- (21) 『名古屋新聞』1923年8月22日付け朝刊5面。
- (22) 『京都日出新聞』1923年8月22日付け夕刊2面。

- (23) 南洋庁 (1934 : 472)。
- (24) 『やまと新聞』1923年8月11日付け夕刊2面欄外。『中央新聞』1923年8月11日付け夕刊2面。当時の南洋群島には、住民児童に対する教育機関として「公学校」が設置されていた。よってここでいう「助教員、学生」とは、公学校の助教員と学生を指す。公学校については、以下が詳しい。南洋群島教育会 (1938 : 197-231)。
- (25) 『都新聞』1923年8月11日付け朝刊11面。
- (26) 『万朝報』1923年8月11日付け夕刊2面。
- (27) 南洋庁長官横田郷助より陸軍次官白川義則宛「南洋群島島民観光ニ関スル件」1924年6月27日 (防衛省防衛研究所所蔵『陸軍省大日記乙輯 : 大正十三年第五類』)。
- (28) 同様の予定が、8月1日付け発行の『南洋協会雑誌』に「第三回内地観光団旅行日程予定」として掲載されている。南洋協会 (1924a : 114-115)。
- (29) 恩賜財団奨学会については以下が詳しい。南洋群島教育会 (1938 : 426-435)。それによると、『日の光』は年2回発行され、公学校の卒業生には無償で配付されたという。
- (30) 日の光 (1925 : 1)。
- (31) アルデヤロウル (1925)。
- (32) 「観光団日誌」には、「編者」による但し書きとして、「コノ日誌ハ大正十三年ノ夏内地エ観光ニ参リマシタパラオノ公学校卒業生アルデヤロウル君ノ書イタモノデ、二三ノ誤ヲ正シタ外ハ原ノママデゴザイマス」という文章が添えられている。アルデヤロウル (1925 : 14)。
- (33) 南洋協会 (1924b : 110)。同雑誌の口絵には、その際のものと思われる集合写真が「南洋観光団本会訪問記念」というキャプションを付して掲載されている。
- (34) 『新愛知』1924年8月4日付け朝刊7面。
- (35) アルデヤロウル (1925 : 21)。
- (36) 『大阪時事新報』1924年8月10日付け夕刊2面。
- (37) アルデヤロウル (1925 : 22)。
- (38) 『大阪時事新報』1924年8月10日付け夕刊2面。
- (39) 『神戸新聞』1924年8月13日付け朝刊6面。
- (40) アルデヤロウル (1925 : 15-18)。
- (41) アルデヤロウル (1925 : 16)。
- (42) アルデヤロウル (1925 : 24-26)。
- (43) 南洋庁 (1934 : 472)。
- (44) 『都新聞』1924年7月28日付け朝刊11面。
- (45) 『大阪時事新報』1924年8月10日付け夕刊2面。
- (46) 『中央新聞』1924年7月29日付け夕刊2面。
- (47) 『都新聞』1924年7月28日付け朝刊11面。

参考文献

- アルデアロウル 1925「観光団日誌」(『日の光』1:14-26)。
- 千住一 2006a『軍政期日本統治下南洋群島における内地観光団』立教大学博士学位申請論文。
- 千住一 2006b「委任統治期南洋群島における内地観光団に関する覚書」(『立教大学観光学部紀要』8:59-64)。
- 千住一 2009a「日本による統治と「オセアニア研究」」(吉岡政徳監修、遠藤央・印東道子・梅崎昌裕・中澤港・窪田幸子・風間計博編『オセアニア学』京都大学学術出版会:321-333)。
- 千住一 2009b「植民地統治と「観光」政策：日本統治下南洋群島における内地観光団を事例に」(寺前秀一編『観光学全集第9巻：観光政策論』原書房:227-259)。
- 南洋群島教育会 1938『南洋群島教育史』南洋群島教育会。
- 南洋協会 1923「南洋群島観光団の歓迎」(『南洋協会雑誌』9(8・9):80)。
- 南洋協会 1924a「内地観光団の来航」(『南洋協会雑誌』10(8):114-115)。
- 南洋協会 1924b「南洋群島観光団の往来」(『南洋協会雑誌』10(9):110)。
- 南洋協会 1925『南洋協会十年史』南洋協会。
- 南洋群島協会編 1965『思い出の南洋群島』財団法人南洋群島協会。
- 南洋庁 1934『第二回南洋庁統計年鑑』南洋庁。
- 日の光 1925「日の光発刊趣旨」(『日の光』1:1)。

表1 第1回内地観光団(1922年)の行程

日数	月日	実施	予定
1	8/4	横浜に入港、東京に到着	
2	8/5	拓殖局、宮城を訪問	
3	8/6		
4	8/7		
5	8/8		
6	8/9		
7	8/10		
8	8/11		
9	8/12		
10	8/13		
11	8/14		
12	8/15	横須賀に向けて東京を出発	横須賀にて工廠、船渠、軍艦を訪問、京都に向けて横須賀を出発
13	8/16		京都に到着、本願寺、京都御所、市役所、桃山御陵、乃木神社を訪問
14	8/17		
15	8/18		
16	8/19		
17	8/20	大阪に到着、大阪城、大日本紡福島工場を訪問	
18	8/21	大阪市役所、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社を訪問	専売局工場を訪問
19	8/22		造幣局を訪問
20	8/23		門司に向けて大阪を出発
21	8/24	門司に到着	
22	8/25	南洋群島に向けて門司を出港	

出典)

各新聞報道にもとづき、筆者作成(2012年6月)。

注)

空欄部分は出典に記載がないことを意味する。

表2 第2回内地観光団(1923年)の行程

日数	月日	実施	予定
1	8/10	横浜に入港、東京に到着	休養
2	8/11		
3	8/12	霊南坂教会を訪問	宮城内拓殖事務局南洋支庁、日比谷公園を訪問、南洋協会による茶話会
4	8/13	宮城、拓殖事務局南洋支庁、日比谷公園を訪問	市役所、日比谷を訪問
5	8/14	軍隊、浅草仲見世、花屋敷、十二階を訪問	浅草公園、花屋敷、十二階を訪問
6	8/15		上野博物館、動物園を訪問
7	8/16		明治神宮、三越、銀座を訪問
8	8/17		印刷局、近衛騎兵連隊を訪問
9	8/18		高等師範附属小学校、植物園を訪問
10	8/19		便宜休養、出発準備
11	8/20		名古屋へ向けて東京を出発
12	8/21	名古屋に到着、名古屋離宮、名古屋製陶工場、名古屋市役所を訪問、京都に向けて名古屋を出発、京都に到着	
13	8/22		市内各名勝を訪問
14	8/23		桃山両御陵、奈良を訪問
15	8/24		大阪に向けて京都を出発
16	8/25	大阪に到着、大阪市役所、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社を訪問	
17	8/26	大阪城、四天王寺、天王寺公園、動物園、市民博物館、新世界を訪問	
18	8/27	造幣局、境川公設市場、市立職業紹介所、簡易食堂、東洋紡績三軒家工場を訪問	
19	8/28	自由市内見物、門司に向けて大阪を出発	
20	8/29		南洋群島に向けて門司を出港

出典)

各新聞報道および大阪府知事土岐嘉平より内務大臣水野錬太郎、外務大臣内田康哉、指定庁府県長官宛「南洋群島々民観光団来往二関スル件」1923年8月29日(外務省外交史料館所蔵「大正十年外国人渡来観光団：二J」)にもとづき、筆者作成(2012年6月)。

注)

空欄部分は出典に記載がないことを意味する。門司の出港日については、注⑧を参照のこと。

表3 第3回内地観光団(1924年)の行程

日数	月日	実 施	予 定
1	7/27	横浜に入港、東京に到着	横濱着上京、健康診断
2	7/28	休養	宮城、拓殖事務局、南洋庁出張事務所、南洋協会、丸ビル、市役所
3	7/29	宮城、三越を訪問	明治神宮、淀橋専売局、浄水場
4	7/30	上野公園、動物園を訪問	三越、浅草公園、動物園
5	7/31	明治神宮、専売局を訪問	休養(希望ノ者ハ教会)
6	8/1	休養	東京発名古屋着、市役所
7	8/2	名古屋に向けて東京を出発、名古屋に到着	熱田神宮、名古屋城、其ノ他工場
8	8/3	木工場、時計工場、名古屋離宮、舞鶴公園を訪問	名古屋発京都有着
9	8/4	京都に向けて名古屋を出発、京都に到着	御所、市役所、東西本願寺
10	8/5	京都御所を訪問	平安神宮、武徳殿、商品陳列館、動物園、大学病院
11	8/6	フクダサイダー製造、大学病院を訪問、活動写真を観覧	桃山御陵、乃木神社、京極四條蹟
12	8/7	奈良を訪問	休養(希望ノ者ハ教会)
13	8/8		京都発大阪着、市役所、大阪朝日大阪毎日新聞社
14	8/9	大阪に向けて京都を出発、大阪に到着、市役所、新聞社を訪問	大阪城、第四師団司令部、造幣局、船場小学校
15	8/10	陸軍関連施設を訪問	新世界、千日前
16	8/11		休養(希望ノ者ハ教会)
17	8/12	神戸を訪問	大阪発神戸着、市役所、湊川神社、川崎造船所、其他
18	8/13	門司に向けて大阪を出発	神戸発門司着
19	8/14	門司に到着	八幡製鉄所、大里製糖会社、其他
20	8/15	八幡製鉄所、大日本製糖を訪問	出發準備
21	8/16	土産を購入	乗船
22	8/17	下関を訪問、荷物の整理	
23	8/18	南洋群島に向けて門司を出港	

出典)

「実施」：アルデアロウル(1925)にもとづき、筆者作成(2012年6月)。

「予定」：南洋庁長官横田郷助より陸軍次官白川義則宛「南洋群島島民観光ニ関スル件」1924年6月27日(防衛省防衛研究所所蔵「陸軍省大日記乙輯：大正十三年第五類」)より転載。

注)

空欄部分は出典に記載がないことを意味する。